

はしがき

私どもが、現在の常任委員会を引き継いだのは2005年のことであった。3月に行われた引継の委員会で、前常任委員会から「2007年に50回大会を迎えることになるので記念事業を考えてほしい」という申し送り事項が伝えられた。正直に云えば、私の最初の印象は「何と間が悪い時期に役員に選出されたのか」というものであった。ここ数年、常任委員会の果敢な決断と努力によって財政状況は好転しており、なんらかの方法で会員への還元を考えなければならない状況にあったことは承知していた。しかし、歴史地理学会は小さい学会でマンパワーが十分でなく、どんな記念事業がふさわしいか戸惑ったからである。最終的には現在の常任委員会が積極的かつ責任を持って関与しなければならないことは暗黙の了解になっていたが、どんな事業を行うにしても多大な負担が伴うため、私だけではなく、常任委員会では議論が小さくなりやすかった。そのため青木栄一先生を委員長として、多くのことに通暁している金田章裕・栗原尚子・溝口常俊・吉越昭久のベテランの先生方からなる「50周年記念事業企画立案特別委員会」を立ち上げ、望ましい企画についてご議論いただいた。その結果は、「学会の外部ならびに海外に対して、歴史地理学の社会的役割をアピールするような国際会議の開催」と「50周年を記念した記念誌の編纂」が提案された。

この特別委員会の答申に沿って、松村祝男常任委員長を記念事業実行委員長として、国際大会の準備委員会と記念誌編集委員会を設置し、2年近く準備を重ねてきた。国際大会は、「文化景観と環境の歴史地理学－歴史地理学の現在と未来－」と題して、2007年9月8日から10日にかけて日本大学経済学部で行われた。国際会議については、「歴史地理学」の特集号（50巻1号）として準備中である。

この記念誌は、歴史地理学会草創期の記録で、今では読むことが難しくなった初期の会員通信や会報の復刻と、創設期より活躍し、現在もお元気な諸先生方による創設期の貴重な証言などから構成されている。残念ながら物故された先生方に関しては、身近に接した方々に思い出や当時の先生方のご活躍ぶりを紹介していただいた。創設期当時、日本の経済と社会は復興期を終え、高度成長に向かいつつあった時代とはいえ、会員通信は謄写版刷り、財政状況も厳しく、まさに隔世の感がある。しかし、それだけに先輩諸先生方の学会を維持・発展させようとしたご苦労と熱気がより明瞭に伝わってくる。先輩諸先生方の意気込みを学びつつ初心にかえり、50年の伝統という財産の重みをかみしめ、大事にしたいものと思う。

常任委員としての通常の業務に加えて、記念誌編集にあられた小口千明氏以下の常任委員、また記念誌編集委員として特別にご尽力いただいた各氏のご苦労に対して、厚く御礼申し上げます。

2007年11月

歴史地理学会会長

石井英也